

## 戦後ソ連における標準化された養育空間についての研究

## —フルシチョフ期ソ連における児童福祉・教育施設の装置化（1956-1980）—

Standardizing Care: The Socio-Technical “Apparatus” of Child Welfare and Educational Facilities in Khrushchev’s Soviet Union (1956–1980)

○太田優我<sup>1</sup>, 田所辰之介<sup>2</sup>\*Ota Yuga<sup>1</sup>, Tadokoro Shinnosuke<sup>2</sup>

This paper conceptualizes boarding schools, orphanages, and therapeutic children’s homes as a socio-technical apparatus of governance that tightly couples policy, design, and operation. Using primary records, codified standards, and contemporaneous life accounts, it offers an empirical history of this apparatus—*universalization* × *standardization* × *operation*—from 1956–1980 (with the Khrushchev era at its core) and renders the efficiency–individualized-care trade-off visible as explicit architectural planning requirements.

## 1. 研究目的と背景

本研究は、寄宿学校・児童院・療育ホームを相互に接続された児童ケアの下部構造として把握し、フルシチョフ期を中核とする 1956-1980 年において、それらが国家の普遍化政策（拡張）、シリーズ設計・モジュール化（標準化）、および施設の生活運営の枠組み（運用）という三層の連関のもとで装置化された過程を実証的に記述するものである。ここでいう装置化とは、政策・設計・運用が循環的に強化し合い、児童の生活を支える空間と制度が迅速供給・低コスト化へ最適化されていく一方個別性・ケアの深さを圧縮しうる構造を指す。

本研究は、一次史料に基づく政策イベントの時系列、標準設計および設計勧告の数値規範（面積・寸法・動線）、ならびに施設生活の記述を同一の枠組みで統合し、効率と個別性の二律背反的な構造を建築計画の言語へと翻訳して示す。とりわけフルシチョフ期は、戦時的臨時措置が国家標準へ移行する成立の決定期として位置づけられ、以後の対象特化・家族型／地域化への展開を説明する基礎枠組みを与える。以上より、児童福祉・教育施設を「標準化される養育空間」として概念化し、その設計上の含意（ユニット構成、感染管理、バリアフリー、外部接点の編成）を明示することが本研究の目的である。

## 2. 研究の方法

(i) 装置分析：政策-設計-生活の三層を往還し、相互制約（資源・人員・衛生・規律）を因果連関として整理する。(ii) 規範-実装ギャップの計量：目標値（在籍 250 万人など）と実際の達成率・不足率を数値で比較する。(iii) 類型学的分析：標準設計のグリッド／ユニット（受入-隔離-医療-居住）を抽象化し、その可

変性・転用性を評価する。(iv) 生活記述の分析：日課・衛生・自給・規律の記録から、空間運用の管理システムの空間的条件（密度・視程・監督）を抽出する。

## 3. 研究の対象と内容

## 3-1. 問題設定と理論枠

本研究は、戦後ソ連における孤児・寄宿政策とその建築化を、〈家族機能の社会化／学習＝労働接続／規律〉の三層が結節する統治的装置として再定義する。装置の作動は、(a) 政策決定・法規範、(b) 標準化された設計・生産、(c) 施設生活のレジーム（運用）の三つの位相に析出され、これらの循環的連関を通じて「包摂の建築」がいかにか実体化したかを論じる。とりわけフルシチョフ期は、戦時的臨時措置の収束と国家的標準化の制度化が同時進行し、装置の成立過程が最も明瞭に観察できる転換点である。

## 3-2. 対象期間とその理由

研究対象の時代をフルシチョフ期、ひいては戦後ソ連に限定する理由は次のとおりである。

本研究は、基本的枠組みとしてスターリン死（1953年3月）からゴルバチョフ書記長就任（1985年3月）までを戦後ソ連の文脈期間とし、その内部で1956-1980年を分析の中核に据える。スターリン期には、1936年憲法が「最も民主的」と称されたものの、民主主義および適法性の諸規定は実質的に遵守されず、1937-38年の大テロルに象徴される暴力的統治が遂行された。これに対し、ポスト・スターリン期の政権は、この状況を「逸脱」と位置づけ、「正常化」（ソビエト民主主義の実質化と社会主義的適法性の回復）を掲げた。とりわけ1956年2月の第20回党大会では、いわゆる「秘密報告」を含む個人崇拜批判が表明され、民主主義と

1：日大理工・院(前)・建築 2：日大理工・教員・建築

適法性の遵守が明確に強調された。続く1961年10月の第22回党大会では、個人崇拜が勤労者の自発性の抑圧および社会主義的適法性・権利・自由の侵害をもたらしたことが公然と指摘され、苦情申立てや要望提出の制度化を通じて、政権側の応答性と住民側の主体性が拡大した。以上の経緯から、ソビエト民主主義の実質化はスターリン死後に本格化したと判断でき、寄宿学校・児童院・療育ホームの制度化・標準化もこの政治的文脈のもとで推し進められた。ゆえに本論は、1953-1985年を歴史的背景の枠としつつ、1956-1980年を装置化の形成・定着を検証する分析対象期間として設定する。

### 3-3. フルシチョフ期と孤児問題

フルシチョフ期は、戦後ソ連における孤児問題が数量的に縮小するとともに、制度的枠組みの再編と標準化が進められた時期である。第二次世界大戦直後には数十万人規模の孤児が存在し、1950年時点で63万5900人に達していたが、1958年には37万5000人へとほぼ半減し、その後も1960年代を通じて減少傾向が続いた。この縮小は、戦後人口の安定化に加え、里親制度や養子縁組の奨励が進んだことによるものである。

一方で、孤児を含む子ども養育を国家的に支える新たな装置として、寄宿学校（インテルナート）構想が1956年以降に推進された。政府は1980年代までに全児童を寄宿学校で教育するという目標を掲げ、1959年から1965年にかけての拡張計画では在籍者数を43万人から250万人へ増やす数値目標が設定された。しかし、資材・人員の不足、費用の高さ（通常学校の約4倍）、さらに親や研究者からの批判（家庭養育の重要性、居住型養育の悪影響）が相次ぎ、構想は縮減された。実際には、1963年時点でソ連の子ども8,200万人のうち居住型施設で生活していたのは1.8%にとどまった。

施設建築面では、孤児院や寄宿学校は住宅と同様に標準設計（типовые проекты）に基づいて整備され、全国的に均質化が進んだ。設計は廊下型・中庭型・分棟型といった平面類型に整理され、食堂・医療室・教室などの機能単位が規格化された。これにより、孤児院は単なる収容施設から教育・生活・医療を包括する社会福祉インフラの一部へと位置づけられた。さらに1960年代後半には、寄宿学校が音楽・数学・美術、特別支援や療養型、スポーツなど専門化した機能を担う方向へ分岐していった。孤児政策は単なる「浮浪児対策」から脱却し、家庭で育てられない子どもや養育困難家庭の子どもを支える制度として恒常化した。このことから、フルシチョフ期は孤児数の収束と並行して、

孤児院・寄宿学校を中核とする「標準化された養育空間」が国家装置として成立した画期であったといえる。

### 4. まとめ

本研究は、ソ連における児童福祉・教育施設の装置化過程を通時的に分析し、効率（速さと数）と個性（ケアの深さ）の二律背反的構造を設計学的観点から示した。まず、効率性の要求は1959-1965年の拡張計画に典型的であり、寄宿学校の在籍者数を43万人から250万人へ拡大する目標に表れた。また、標準設計（типовые проекты）の適用により、全国規模で同質の施設を短期間に供給する仕組みが整備された。

一方で、個別性・ケアの深さを担保するための要件は1980年の「知的障害児ホーム」設計勧告に具体化され、居住ユニット編成（40～70人に対する小食堂、14-21㎡/人の基準）、感染発生時のユニット隔離、バリアフリー寸法（扉幅・廊下幅・段差）および内部動線の規定が明示された。さらに、外部空間の利用・緑地整備や作業訓練の位置づけが、施設運用の標準化項目として整理された。加えて、1980年代以降の報告では、施設依存が退所後の自立困難を招き、ホームレス化・犯罪化・自殺率の高さが指摘されており、退所支援や地域社会との連続性の欠如が深刻な課題であったことが確認される。以上より、ソ連の児童養育施設は「標準化された大規模性」と「療育ユニットの小規模性」が併存する二層構造を有し、各資料において示された設計・運用上の要件として、小規模ユニット化（ユニット編成・隔離運用）、外部接点の制度的配置（敷地緑地・園芸・訓練等のプログラム化）、退所後支援を含む生活連続体の整備（脱施設化研究の指針）、可変モジュール化（隔離・転用に対応する構成・動線規定）が必要要件として提示されていたことが明らかになった。

### 5. 参考文献

- 1) 松戸清裕『ソヴェト・デモクラシー 非自由主義的民主主義下の「自由」な日常』、岩波書店、2024年7月17日
- 2) 本田晃子『革命と住宅』ゲンロン、2023年9月25日
- 3) 松戸清裕『ソ連史』ちくま新書、2011年12月10日
- 4) A. ワース編、訳 湯浅正義、『変るソ連—フルシチョフが出てから（1963年）—』、岩波書店、1963年8月29日
- 5) Загарова・L・N『Дитя в очередь за лаской（愛情を求める子ども）』、モスクワ、2002年
- 6) ステパノワ・V・E『フルシチョフ期における学校インテルナート：歴史的レビュー』、電子科学ジャーナル『Дневник науки（学術日誌）』、第11号、2023年
- 7) ユーディナ・タチヤナ『Сказ об Ировском детском доме（イロフ孤児院の物語）』、クムルタウ市第一総合学校、2003年
- 8) Disney, Tom『Complex spaces of orphan care: A Russian therapeutic children's community』、Children's Geographies, vol. 13, no. 1, Routledge, 2015年, pp. 30-43.
- 9) Н.Н. Штегина・M.H. Тюличева『知的障害児のホーム設計勧告』、モスクワ：国家建設建築委員会・中央教育施設設計研究所、1980年
- 10) ミリアム・ギャレー『Builders of Communism, "Defective" Children, and Social Orphans: Soviet Children in Care after 1953』、シェフィールド大学大学院 歴史学部 博士論文、2019年4月